

歴史のある地方都市の疲弊は全国各地で多く見受けられる。そうした土地を訪れると、その繁栄の歴史を次世へ伝えるために努力をしている人々に出会う。彼らは自らの生まれ育った町に誇りと自信を持ちながらも現実を直視し、何とか観光客誘致により地域活性化の方向を探っている。群馬県桐生市もそんな地方都市のひとつと言えるだろう。

桐生の歴史は1350年、桐生国綱という武将が現在の市街地の北側に山城を築いたのが始まりといわれる。その後、徳川家康の江戸城入場を機に絹織物の町として評判が高まり商いが活発化、日本のフィレンツェと称されるようになった。桐生が商いで一世を風靡した要因はいくつかあるが、何よりも桐生が天領であったために職人、商人の自由な発想や風土が商売相手から重宝がられたことが大きい。急激な発展を遂げた桐生は「西の西陣、東の桐生」とも言われるまでに成長したが、昭和40年代に入り和装離れが進むと、国内需要の減退と安価な輸入品にも押され、急激な衰退を余儀なくされた。まさに桐生の繁栄と衰退の歴史は日本の絹織物の歴史である。

こうした歴史背景と相まって、桐生市内にはその足跡をうかがわせる近代化遺産が多数点在している。産業遺産を活用して産業観光をベースにした観光誘致活動を行うのは清水宏康さんが理事長を務めるNPO法人桐生再生のメンバーたちだ。清水さんは桐生で生まれ地元信用金庫に就職、38年間にわたり地元銀行マンとして地元経済発展を担ってきた。

2年前に定年を迎えたが、元気がなくなった桐生を何とか活性化しようと活動している。まず手掛けたのは桐生の象徴でもあるレンガ造りの三角屋根の紡績工場群の保存である。2年前には大正8年に築造され壊れかけていたレンガ造りのレース工場を保存するため、地元の実業家と交渉し自家製のバ

ンが有名なカフェレストラン「レンガ」を誘致、現在では市民をはじめ観光客の立ち寄りスポットとして人気を集めている。また昨年6月からは「歴史の街桐生」を売り出すため、12人の有志からなるガイドツアーの運用も開始し、去年は約1700人を案内した。

こうした町おこしの輪は徐々に市民に定着し始め、09年度のガイド養成講座には18人が応募した。現在は、①桐生の象徴である「のこぎり屋根めぐりコース」、②近江商人の矢野久左衛門が店舗として構えた土蔵めぐりとからくり人形を見学する「有鱗

館めぐりコース」、③ニューヨーク近代美術館で人気の商品を製造する松井ニット技研などを巡る産業観光「あーとほーる銚屋めぐり」、④桐生市全景が見渡せる水道山展望台などを巡る「美術館と遊園地めぐり」といったガイドツアーを1人500円のガイド料金を取受し催行している。

富岡製糸場と絹産業遺産群に代表されるように群馬には産業遺産が数多く残っているが、地元では絹織物にかかわる産業全般を体系的に告知し、①六会村の繭、②富岡の製糸、③桐生の織物の3つを合わせて「シルクイン群馬」として売り出す

ため、「シルクカントリーIN桐生」と題したシンポジウムを行う予定だ。また、織物という地域資源を活かした街づくりや同市で進めている重要伝統的建設物群保存地区選定に向けた取り組みなどについて、今後の方針を策定するための議論を進めている。

地方都市の元気の源は、何といたっても地元を愛する強い意志を持った地域リーダーが周りの市民を巻き込み拡大発展していくこと。今回のこの桐生に関しても、まさに1人のリーダーの熱い郷土愛が、自発的な民力に火を付けて活性化している。また、自治体としても観光庁の観光まちづくりコンサルティング事業に応募するなど、意欲的に動きだした。

地域活性化 伝道師が行く

文・篠原靖



NPO法人桐生再生の清水宏康理事長（左）と

vol.
16

桐生で広がる 町おこしの輪

しのはら・やすし ●81年東武トラベル入社。05年から企画仕入部副部長として観光素材の発掘・旅行商品化を手掛ける。この実績から07年、内閣府地域活性化伝道師に任命。